

幸福の赤いサクランボ

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2.7畝のサクランボ園を経営する。

今年、当農園のサクランボの出荷販売額は昨年比10%増の目標を越え、約12%増加した。今年も収穫シーズン前から、売上額が目標を達成したら、7人の社員の他にこれまでお世話になった多くの方をお招きしてバーベキューパーティーを開催しようという計画されていて、実際に8月12日に行った。

集まってくれたのは約20人。繁忙期に収穫や箱詰め作業を手伝ってくれたアルバイトの方、取引先のカタログギフト会社の方、農園の建物や



多田さん(左から3番目)と社員たち。これから剪定(せんでい)作業に追われる日々を迎える山辺町

農業は「魅力ある職業」挑み続ける

設備の面倒を見てくれる建設関係の方、そして、これまで私を指導してくれて、今も私が師と仰ぐサクランボ農家の鈴木仁さん(73)。鈴木さんたちに私が農園の後継者として指名した安食政史君(27)を紹介しながら、私は遠く離れた子どもたちを思った。

昨年春に鹿児島大学の准教授となった長男は、夢であった国文学の研究に力を注いでいる。長女もプロの画家を目指し、東京で活動している。この連載の1回目で、私は就農する直前まで農業は「魅力のない職業」と思っていたと書いた。そして2回目では農園を継ぐことを決意し、病床の父に、自分の子どもたちが「父は農業をしている」と胸を張って言える農業をしたい、と伝えたとも記した。

あれから20年。私は子どもたちが夢に向かって努力する姿を糧に、多くの方の力もいただいて農園を拡大してきた。息子たちも、今の農園を見てきくと喜んでくれると思う。そして、農園を大きくするために若い社員たちがこれからも挑戦していく様子を息子や孫たちに見せられることは、私にとっても何よりの喜びでもある。

この連載も、28回目となる今回で終わる。連載は終わるが、私自身、これからも若い社員とともに挑み続けるつもりだ。父に言ったあの時の言葉を実現し、農業が「魅力ある職業」だと少しでも多くの人に知ってもらうために。